

途上国への援助行動が抑制される要因についての研究

— 個人的要因・状況的要因の関係性について —

Factors Inhibiting from Helping Behavior for Undeveloped Country
— Relation between Personal Factors and Situational Factor —

李艶・富田裕輔*

Li Yan, Tomita Yuusuke

要 約

援助行動を促進する要因に関する研究が多く見られるが、本研究は、逆の視点、すなわち、援助行動が抑制される要因について検討を行った。本研究は大学生を対象に、途上国への援助行動が抑制される要因について、個人的要因と状況的要因がどのように影響しているかを検討することを目的として、調査研究を行った。

その結果、個人的要因では「社会適応性」、「外向性」の因子に、状況要因では「援助の必要性の認知」、「援助に対する責任」、「援助方法の理解」の因子に、援助行動経験あり群と経験なし群、将来援助行動をしない群それぞれの間に有意差が得られた。社会への適応が不十分であり、関心が自己の内面に向きやすい人は、援助行動が生じにくい傾向があるといえる。「援助の必要性の認知」、「援助に対する責任」、「援助方法の理解」の低下が援助行動を生じるにくくすることがわかった。したがって、将来学ぶ機会があれば、「援助方法の理解」を深め、援助行動が促されるであろう。

Key Words : 援助行動, 個人的要因, 状況的要因, 途上国

目 的

現在、世界の経済力の格差は大きく、深刻な問題となっている。2010年5月10日、世界保健機関（WHO）の「World Health Statistics 2010（世界保健統計 2010）」によると、日本人の平均寿命は83歳で193カ国中1位。世界の平均寿命は、男性が66歳、女性が70歳、男女平均が68歳。最も平均寿命が短いのは、アフガニスタンとジンバブエで42歳。日本と40歳近く差がある。さらにフィンランドに生まれた人の成人識字率が99.0%であるのに対して、マリに生まれた人のそれは23.0%である（総務省統計局発行「世界の統計2009」より）。

米国の1人当たり国内総生産が47,186米ドルであるのに対して、シエラ・レオネ人のそれは561米ドルである（*National Accounts Main Aggregates Database* 2009）。OECD加盟国の1人当たりの購買力が33655米ドルであるとき、ジンバブエのそれは188米ドルである。また、ユニセフの世界子供白書2005によると、子どもの5人に1人、子どもも含め、12億人がひどく貧しい状態で、1日1米ドル未満で生活しており、6億4千万人の子供がちゃんとした住居に住んで

*聖泉大学卒業生（2010年3月）、現在NPO活動をしている。

いない。さらに5億人の子供がトイレなどの衛生設備のない家で暮らしており、4億人の子供が安全な水を利用することができない。世界は今、このような状況にある。

このような問題を解決するためには、先進国からの援助が必要不可欠であり、個人でも募金などの援助を行うべき状況である。ところが、海外への経済的援助活動に関心を持つ人は多いが、実際に援助活動を行う人が少ないのが実状である。

これまで、人がどのような理由で援助行動を行うかについては、多くの研究で取り上げられている。援助行動が生じる要因を大別すると、**個人的要因と状況的要因**の2つに分けられる(中村, 1976)。

個人的要因とは、主に個人の性格のことである。過去の研究で、社会適応性、個人志向性・社会志向性、非競争性、外向性、内部統制型、共感性などが、援助行動を生じさせやすい性格だと指摘されている(中村, 1976)。状況的要因とは、援助場面のことである。援助場面において、まず、事態に気付くことが必要であり、援助が本当に必要かどうかの判断を行い、自分が援助しなければならないかを考え、援助方法を知っていて、援助にともなう得失を計算した上で、援助に着手するか否かを決定する。そのすべてに「イエス」という判断が得られなければ、援助行動は生じにくい。

すなわち、先行研究では、次のようにプロセス化されている。①状況の発見→②援助の必要性の認知→③自己責任の確認→④援助方法の決定→⑤得失の計算→⑥援助の実行(Latan'e, B Darley, J. M, 1970,)。

なお、援助場面における状況要因については、既存の尺度が見当たらないため、筆者らは先のプロセスに当てはまるような尺度を考案している(李・富田, 2009 未発表)。

- ①状況の発見については、「私は世界の経済格差についてある程度知っている」等の、国際経済格差に関する知識をどの程度もっているかを測る質問項目を4つ作成した。
- ②援助の必要性の認知については、「私は貧しい国への援助は必要だと思う」等の、国際援助の必要性をどの程度認知しているかを測る質問項目を3つ作成した。
- ③自己責任の確認については、「自分には、貧しい国の人を援助する責任があると思う」等の、国際援助に対する自己責任をどの程度感じているかを測る質問項目を5つ作成した。
- ④援助方法の決定については、「私は具体的な援助方法を知っている」等の、国際援助場面での援助方法をどの程度認識しているかを測る質問項目を2つ作成した。
- ⑤得失の計算については、「私が援助を行っても、自分が大きな損をするわけではないと思う」等の、国際援助場面での自己の得失の計算結果がどの程度できるかを測る質問項目を2つ作成した。
- ⑥援助の実行については、「私は実際に援助を行おうと思う」等の、国際援助場面において、どの程度実行するかを測る質問項目を3つ作成した。

従来の援助行動に関する研究では、状況的要因の方が個人的要因よりも、援助するかしないかを決定する際には、大きくかかわっていることが示唆されている(原田・狩野,)。しかし、現実

の援助場面では、状況的要因のプロセスごとに明確に意識して決定するより、無意識的に判断する場合が多い。ではどのような要因が、援助行動に影響しているのだろうか。

援助行動を行わない理由については、傍観者効果による援助の抑制が働くことが報告されている (Latan'e, B. Darley, J. M. 1970)。つまり、先に述べた状況的要因のプロセス③の低下である。この傍観者効果が生じる理由として、竹村は3つの理由を挙げている。

- ①援助の必要性を認知していても、身近に第三者が存在すると援助の責任が自分にあると認知され難く、援助に対する責任は互いの中で分散して1人ずつの責任は低減する (**責任の分散**)。
- ②事態をどう判断・解釈してよいのかわからない場面に直面したとき、私たちは行動の基準をまわりにいる第三者に求める。そこで、まわりの他者が事態を無視して何も行わなければ、援助するほどの事態ではないと解釈されやすくなる (**社会的比較**)。
- ③援助が必要とされるような事態でも自分1人だけが行動を起こした場合、自分だけが周囲から逸脱することになる。このとき「まわりの人たちは自分のことをどう思うだろうか」「出しゃばりでお節みなやつと思われぬか」といった不安を感じる。まして、その行動が不適切な場合には援助された人からも非難される可能性あり、これが援助行動を抑制する (**評価懸念**)。これら3つが援助行動を抑制する理由として考えられる。

このような傍観者効果は、個人から個人への援助行動に関するものであり、個人から集団への援助行動にも影響するという報告はされていない。しかし、個人から集団への援助行動であっても、責任の分散効果からプロセス③が低下し、援助行動抑制に影響を与えているのではないだろうか。また、他にはどのような要因が影響するのであろうか。

そこで本研究は、集団つまり途上国への援助行動を行わない理由を、個人的要因、状況的要因に着目し、調査・検討をし、それらの要因間の関係を明らかにすることを目的とした。

方 法

被調査者 滋賀県にある大学に在籍する大学生130名 (男子68名, 女子62名) を対象にして、質問紙による調査を実施した。

質問紙 本研究調査に使用した質問紙は以下の下位質問群から構成されている。

1. 個人的要因: 個人的要因については、社会適応性、個人志向性・社会志向性、非競争性、外向性、内部統制型、共感性を下位尺度として、5件法で調査した。

社会適応性とは、社会に適応する能力のことであり、社会に適応している人の方が援助行動が起りやすいことが報告されている。そのため、社会志向性を測る尺度を用いた (酒井・山口・久野, 1998) (問1~3)。

個人志向性・社会志向性とは、人格発達や適応の過程で個人が重視する基準の個性化・社会化のことであり、両志向性が肯定的であれば、援助行動が起りやすいとされている。そのため、個人志向性・社会志向性を測る尺度を用いた (伊藤, 1993; 1995) (問4~6, 問9~17)。

非競争性とは、他人との競争を好まない性格のことであり、援助行動が起りやすいことが報

告されている。そのため、新性格検査の中から、非競争性尺度の項目を用いた（柳井・柏木・国生，1987）（問7～8）。

外向性とは、関心が自己の外に向きやすい性格のことであり、外向的な人の方は援助行動が起りやすいとされている。そのため、新性格検査の中から、外向性尺度の項目を用いた（柳井・柏木・国生，1987）（問18～20）。

内部統制型とは、自分の行動と強化が随伴すると認知し、自分の能力や技能によって強化がコントロールされているという信念のことであり、この信念により、援助行動が起りやすいとされている。そのため、Locus of Control尺度の中から、内部統制型を測る尺度を抽出して用いた（藤原・樋口・清水，1982）（問21～23）。

共感性とは、他者の心情を感じ取る能力のことであり、援助行動や思いやりなどに影響を及ぼすとされている。そのため、共感性を測る尺度を用いた（加藤・高木1980）（問24～32）。

2. 状況的要因

状況的要因については、①状況の発見、②援助の必要性の認知、③自己責任の確認、④援助方法の決定、⑤得失の計算、⑥援助の実行を、個人からの国際援助の場面に当てはめ、オリジナルで質問項目を作成し（李・富田，2009未発表）、5件法で調査を行った。

①**状況の発見**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「私は世界の経済格差についてある程度知っている」等の質問項目をオリジナルで作成した（問1～4）。

②**援助の必要性の認知**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「私は貧しい国への援助は必要だと思う」等の質問項目をオリジナルで作成した（問5～7）。

③**自己責任の確認**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「自分には、貧しい国の人を援助する責任があると思う」等の質問項目をオリジナルで作成した（問8～12）。

④**援助方法の決定**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「私は具体的な援助方法を知っている」等の質問項目をオリジナルで作成した（問13～14）。

⑤**得失の計算**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「私が援助を行っても、自分が大きな損をするわけではないと思う」等の質問項目をオリジナルで作成した（問15～16）。

⑥**援助の実行**については、個人からの国際援助の場面に当てはめ、「私は実際に援助を行おうと思う」等のオリジナル質問項目を作成した（17～20）。

以上の質問紙の詳細は添付資料に示している。

3. 自由記述

援助を行っている人が少ない理由、またどうすれば国際格差が縮まるかについて自由記述をしてもらった。

フェイスシート

性別、年齢、国籍、職業、途上国への援助の経験の有無、将来援助を行うか否かについて記入してもらった。

手続き 調査は2009年4月から5月までの期間に実施した。実施に当たって、被調査者の承諾を得た上で、授業時間の一部や休み時間を利用して集団で実施した。

結 果

1. 個人的要因の因子構造

回答に不備のあるデータ等を除外したため、最終的には121名（男子64名、女子57名）のデータを分析に用いた。

まず、個人的要因尺度の因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子数は6側面を予測しているため、6因子に限定した。なお、因子負荷量±0.4以上が2つ以上あった項目は、除外して再度分析を行った。その結果を表1に示している。

表1 援助行動の個人的要因の因子分析結果

項目番号	I	II	III	IV	V	VI
5	0.839	-0.079	-0.048	0.043	0.005	0.239
1	0.836	0.16	-0.012	0.066	-0.151	-0.045
2	0.827	-0.037	-0.082	0.136	0.046	-0.109
3	0.732	-0.166	-0.019	0.086	0.082	0.044
4	0.719	-0.231	-0.007	-0.089	0.024	0.291
6	0.506	0.093	0.19	-0.225	0.253	0.03
9	0.468	-0.239	-0.005	0.017	0.016	-0.076
29	-0.428	-0.087	0.156	0.335	0.219	0.378
31	0.025	0.81	0.107	-0.015	-0.199	0.121
11	0.223	-0.711	0.058	0.053	-0.232	-0.041
10	0.237	-0.687	0.077	0.171	0.057	-0.006
30	-0.04	0.664	0.258	0.065	0.007	0.09
13	-0.01	0.567	-0.209	0.315	-0.054	-0.031
12	0.199	0.483	-0.279	0.049	0.278	0.266
20	0.02	0.034	0.756	-0.05	-0.065	0.133
18	-0.094	-0.063	0.737	0.137	0.127	-0.206
19	-0.067	-0.042	0.72	0.015	0.15	0.287
25	0.274	0.282	0.439	-0.124	-0.005	-0.171
16	0.063	0.216	-0.086	0.77	-0.014	-0.052
17	0.142	-0.057	0.095	0.733	-0.085	-0.043
28	-0.071	-0.106	-0.049	0.569	0.134	0.135
15	-0.076	0.001	0.159	0.47	-0.288	0.16
24	0.079	-0.041	0.26	0.343	-0.072	-0.202
8	0.034	0.064	-0.029	-0.044	0.855	-0.054
7	0.018	-0.105	0.181	-0.034	0.753	-0.098
22	0.192	0.21	0.225	-0.007	-0.134	0.692
26	0.147	0.1	0.072	0.161	0.324	-0.62
21	0.115	0.142	-0.038	0.106	0.089	0.521

註：太字は因子負荷量が±.40以上を示す。

表1より、第1因子は、「私は困っている人を見ると放っておけない気持ちになる」、「私は人の役に立てたり、人と助け合えたりすることに、充足感を見出す」、「私は他人のことを、深く理解したいと思う」、「私は人に対しては誠実であるよう心掛けている」、「私は社会のために役に立つ人間になりたい」、「私は周りとの調和を重んじている」、「私は自分の個性を活かそうと努めて

いる」、「私は周りの人が悩んでいても平気でいられる」についての項目が高い負荷量を示しており、「**社会適応性**」が確認された。**第2因子**は「私は自分の心に正直に生きている」、「私は周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる」、「私は何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い」、「私は人前では見せかけの自分をつくってしまう」、「私は感情的に周りの人からの影響を受けやすい」、「私は友人が動揺していたら、自分まで動揺してしまう」についての項目が高い負荷量を示しており、「**共感性**」が確認された。**第3因子**は、「私は話し好きである」、「私は生き生きしていると人に言われる」、「私は初対面の人には自分のほうから話しかける」、「私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ」についての項目が高い負荷量を示しており、「**外向性**」が確認された。**第4因子**は、「私は個性が強すぎて、人とよくぶつかる」、「私は自分中心で考えることが多い」、「私は周りのことを考えず、自分の思ったままに行動することがある」、「私は不幸な人が同情を求めているのを見ると、嫌な気分になる」についての項目が高い負荷量を示しており、「**自己中心性**」が確認された。**第5因子**は、「私は周りの人間との競争は好まない」、「私は周りの人間との争いごととは避けるほうだ」についての項目が高い負荷量を示しており、「**非競争性**」が確認された。**第6因子**は、「私は人生における不幸な出来事の多くは、不運によるものだと思う」、「私はくじ引きや占いなどを頼りとして、決断を下すことがしばしばある」、「私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる」についての項目に高い負荷量を示しており、「**内部統制型**」が確認された。

2. 状況的要因の因子構造

次に、状況的要因尺度の因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。因子数は6側面から考えたため、6因子に限定した。その結果を表2に示している。

表2より、**第1因子**は、「自分自身が、何らかの援助行動を行う必要があると思う」、「自分には、貧しい国の人を援助する責任があると思う」、「私自身は先進国に生れたのだから、途上国に援助すべきだと思う」、「仮に友人の大半が援助活動を行うことに責任を感じていたら私も責任を感じるだろう」、「私は実際に援助を行おうと思う」、「友人に誘われたら、私も援助を行うだろう」、「私は実際に援助を行う気にはなれない」、「仮に友人の大半に援助活動の参加を促されたとしたら、私も活動に参加するだろう」についての項目が高い負荷量を示しており、「**援助に対する責任**」と定義した。**第2因子**は、「私は貧しい国の人には、生活が苦しいと思う」、「私は貧しい国の人には、援助を求めていると思う」、「私は貧しい国への援助は必要だと思う」、「私は貧しい国への経済的支援はなくてはならないものだと思う」についての項目が高い負荷量を示しており、「**援助の必要性の認知**」と定義した。

第3因子は、「私は具体的な援助方法を知っている」、「私は貧しい国への援助の方法がわかる」、「私自身からの貧しい国への援助は、簡単なことだと思う」についての項目が高い負荷量を示しており、「**援助方法の理解**」と定義した。**第4因子**は、「私は世界の経済格差についてある程度知っている」、「私は母国以外の国の経済事情に関心がある」の項目が高い負荷量を示しており、「**状**

況の発見」と定義した。第5因子は、「私が援助をしなくても、周りの人がやってくれると思う」、「私が援助を行っても、自分が大きな損をするわけではないと思う」の項目が高い負荷量を示しており、「得失の計算」と定義した。

第6因子は、「仮に友人の大半が途上国の経済事情に関心があったら、私も関心を持つだろう」の項目が高い負荷量を示しており、「他者の援助行動の認知」と定義した。

表2 援助行動の状況的要因の因子分析結果

項目番号	I	II	III	IV	V	VI
10	0.953	0.064	-0.078	0.147	0.163	-0.068
9	0.943	-0.009	-0.072	0.265	0.076	-0.062
17	0.736	-0.031	0.208	0.111	-0.206	-0.165
18	0.686	0.042	-0.068	-0.069	-0.08	0.247
11	0.686	-0.037	0.038	-0.092	0.18	0.331
8	0.604	0.232	-0.123	0.028	-0.288	0.062
20	0.536	-0.08	0.238	-0.348	0.149	0.268
19	-0.507	0.059	-0.198	0.138	0.342	0.189
3	-0.235	0.929	-0.011	0.096	0.001	0.146
5	0.067	0.803	0.066	0.184	0.028	-0.061
7	0.262	0.741	0.003	-0.086	0.172	-0.114
6	0.18	0.731	-0.104	0.02	-0.116	0.019
16	0.014	0.276	0.827	-0.193	0.013	-0.251
13	0	-0.197	0.79	0.305	-0.029	0.08
14	0.051	-0.212	0.776	0.283	0.014	0.059
2	0.224	0.006	-0.039	0.777	-0.16	0.261
1	-0.136	0.3	0.361	0.642	0.168	0.014
12	-0.028	0.152	0.135	-0.122	0.834	0.183
15	-0.126	0.198	0.217	-0.066	-0.678	0.311
4	0.054	0.019	-0.128	0.287	0.043	0.934

註：太字は因子負荷量が±.40以上を示す。

3. 援助行動要因の分散分析結果

援助行動の有無によって、どのような因子に違いがみられるかを調べるため、まず、援助行動要因（個人的要因、状況的要因）×被験者間（1群：経験あり（ボランティア活動、以下同様）、2群：経験なし、将来する、3群：経験なし、将来しない）の2要因分散分析を行った。その結果を表3に示している。表3の結果を見ると、要因間、被験者間、相互作用において、有意差が認められた「要因間」($F = 748.989, p < .001$)「被験者間」($F = 7.564, p < .001$)「相互作用」($F = 4.842, p < .01$)。被験者間要因の主効果における結果をみると、1群と3群の間に有意差がみられた。単純主効果における結果をみると、状況要因に有意差がみられた。

上述の分散分析結果より、1群と3群間に有意差がみられたため、まず、個人要因×被験者（1群と3群）の2要因分散分析を行った。その結果を表4に示している。

表4の結果をみると、個人的要因尺度間 ($F = 441.355, p < .001$)、相互作用 ($F = 2.337, p < .05$)に有意差がみられた。また個人的要因の主効果における結果をみると、社会適応性 ($F = 3.510, p < .10$)、外向性 ($F = 6.092, p < .01$)に有意差がみられた。

表3 援助行動要因×被験者の2要因分散分析結果

	1群 (n=27)		2群 (n=34)		3群 (n=61)	
	M	SD	M	SD	M	SD
個人的要因	105.037	10.13	103	12.099	103.373	11.521
状況的要因	67.074	9.786	61.676	12.655	53.784	10.348
F 値						
要因間			748.989		0.0000 ****	
被験者間			7.564		0.0007 ****	
相互作用			4.842		0.0088 **	
被験者要因の主効果における結果						
	t	p	sig			
1群と3群	3.914	0.000121	s			
1群と2群	1.797	0.073766	n.s			
2群と3群	2.116	0.035497	n.s			
単純主効果における結果						
	F	P				
個人	0.318	0.7277				
状況	12.087	0.0000 ****				

注 1群：経験あり，2群：経験なし3群：経験なし，将来しない，を示す（以下同様）
+ p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.005, ****p<.001

表4 個人要因×被験者の2要因分散分析結果

	1群 (n=27)		3群 (n=51)	
	M	SD	M	SD
社会適応性	28.444	5.050	27.078	4.320
協調性	19.444	2.587	19.863	2.401
外向性	13.407	2.871	11.608	3.373
自己中心性	11.481	3.436	12.098	3.151
非競争性	6.926	2.403	7.843	1.685
内部統制型	9.259	1.413	8.941	1.883
F 値				
	F	p		
要因間	0.735	0.3916 ****		
被験者間	441.355	0.0007 ****		
相互作用	2.337	0.0411 **		
個人要因の主効果				
	t	p	sig	
社会適応性	3.5100	0.0616	+	
協調性	0.3290	0.5664		
外向性	6.0920	0.0139	*	
自己中心性	0.7150	0.3982		
非競争性	1.5820	0.2090		
内部統制型	0.1900	0.6629		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.005, ****p<.001

次に、状況的要因×被験者（1群と3群）の2要因分散分析を行った。その結果を表5に示している。表5から、被験者間（ $F = 54.145$, $p < .001$ ）、状況的要因間（ $F = 423.659$, $p < .001$ ）、相互作用（ $F = 12.008$, $p < .001$ ）において有意差が見られた。また状況要因の主効果における結果をみると、援助に対する責任（ $F = 91.256$, $p < 0.01$ ）、援助方法の必要性の認知（ $F = 3.039$, $p < .10$ ）、援助方法の理解（ $F = 17.754$, $p < 0.01$ ）に有意差が見られた。

表5 状況要因×被験者の2要因分散分析結果

	1群 (n=27)		3群 (n=51)	
	M	SD	M	SD
援助に対する責任	26.926	5.256	19.882	5.426
援助の必要性の認知	15.148	3.352	13.863	3.526
援助方法の理解	9.185	2.969	6.078	2.916
事態の発見	6.000	1.700	5.353	1.918
得失の計算	6.519	1.101	6.000	1.455
他者の援助行動の認知	3.296	1.242	2.608	1.189

	F 値	
	F	p
被験者	54.145	0.000 ****
状況要因間	423.659	0.000 ****
相互作用	12.008	0.000 ****

状況要因の主効果			
	F	P	sig
援助に対する責任	91.256	0.0000	****
援助の必要性の認知	3.039	0.0820	+
援助方法の理解	17.754	0.0000	****
事態の発見	0.770	0.3806	
得失の計算	0.495	0.4823	
他者の援助行動の認知	0.872	0.3509	

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .005$, **** $p < .001$

4. 質的データの分析結果

質的データ、すなわち自由記述方法で得られたデータをKJ法（文化人類学者川喜田次郎がデータをまとめるために考案した手法）によって分析した。本研究では、自由記述の内容を一つ一つキーワードで示し、5つのカテゴリーに分類した。要因1は「自己中心」、要因2は「無関心」、要因3は「宣伝不足」、要因4は「格差がなくなる」、要因5は「方法がわからない」であった。その結果を表6に示している。

表6 各要因の回答者人数

	自己中心	宣伝不足	無関心	方法が分からない	格差はなくなる
全体	29	19	17	11	10
1群	6	5	4	3	0
3群	16	7	8	2	6

考 察

まず、個人的要因尺度の因子分析を行ったところ、「社会適応性」、「共感性」、「外向性」「自己中心性」、「非競争性」、「内部統制型」の6因子が抽出された。この結果は、予測していた6側面とほぼ同様の結果であったといえる。つぎに、状況的要因尺度の因子分析を行ったところ、「援助に対する責任」、「援助の必要性の認知」、「援助方法の理解」、「事態の発見」、「得失の計算」、「他者の援助行動の認知」の6因子が抽出された。この結果についても、予測していた6側面とほぼ同様の結果であったといえる。この結果から、個人から集団への援助場面における因子構造と、個人から個人への援助場面における因子構造とが、ほぼ同様であることが確認された。

表3の結果から、援助行動経験ありの人（1群）と援助行動経験なし、将来しない人（3群）との間に有意差があったことから、1群に属する人と3群に属する人の間には、何らかの要因が影響を及ぼしていることが分った。また、個人的要因には有意差はみられず、状況的要因に有意差がみられた。このことから、原田・狩野（1982）が行った研究結果と同様に、個人的要因よりも状況的要因の方が援助行動に影響を及ぼすことが確認された。

表4の結果から、援助行動経験ありの人（1群）と援助行動経験なし、将来しない人（3群）における個人的要因の因子では、「社会適応性」、「外向性」に有意差があり、1群のそれぞれが有意に高いことがわかった。このことから、社会に適応しており、関心が自己の外側に向かいやすい性格の人の方は、援助行動が生じる傾向があるといえる。逆に、社会への適応が不十分であり、関心が自己の内側に向きやすい人の方は、援助行動が生じにくい傾向があるといえる。すなわち、国際経済格差は社会問題であり、自己の外で起きていることなので、このような人には援助行動が生じにくいと考えられる。

表5の結果から援助行動経験ありの人（1群）と援助行動経験なし、将来しない人（3群）における状況的要因の因子では、「援助の必要性の認知」、「援助に対する責任」、「援助方法の理解」に有意差があり、1群のそれぞれが有意に高いことがわかった。このことから、国際援助場面において、状況的要因のプロセスの②援助の必要性の認知、③自己責任の確認、④援助方法の決定が高いほど、援助行動が生じる傾向があるといえる。逆に、低いほど援助行動が生じにくい傾向があるといえる。つまり、プロセス③の低下が援助行動を抑制しているのではないかという仮説を指示した結果といえる。また、プロセス②や④の低下も援助行動を抑制している可能性があるといえる。

プロセス②**援助の必要性の認知**の低下の要因については、国際経済格差への関心の低さが考えられる。自由記述の回答の中にも、「自分には関係ない」「自分がよければそれでよい」などの回答や「国が何とかすればよい」のような回答が多くみられた。

自由記述の回答の中にも、国の政策についての記述がいくつかあったが、労働組合も含めた様々なNGO、医療関係の人道的団体の活動などは、ODAの統計からは無視されているとしても、小規模でも間違いなく受入国の福祉や健康の向上に貢献する援助である。このような援助に対する意識の低さがプロセス②の低下の要因であることが考えられる。プロセス②を上昇させ、援助

行動を促す具体的な手段としては、途上国の現実を宣伝していくことが必要だと考えられる。自由記述の回答でも、「途上国の現実の宣伝が足りない」「途上国の現実を宣伝すべき」などの記述が多かった。宣伝することで、社会問題への意識が高まり、プロセス②が上昇し、援助行動を促すことができるのではないだろうか。

プロセス③**自己責任の確認**の低下の原因については、責任の分散効果が影響していると考えられる。自由記述の回答の中にも「余裕がある人がしたらよい」、「誰かがやってくれる」などの記述があった。援助の必要性を認知していても、身近に第三者が存在すると援助の責任感が自分にあると認知され難く、援助に対する責任は互いの間に分散して1人ずつの責任は低減する可能性があると考えられる。また、社会的比較によって、例えば援助の必要性を認知していても、援助するほどの事態ではないと解釈されてしまっている可能性も考えられる。プロセス③を上昇させ、援助行動を促す具体的な手段としては、本調査のような、途上国への援助をしている原因について明らかにして、このような結果を社会に公表していくことが必要だと考えられる。そうすればプロセス③が上昇し、援助行動を促すことができるのではないだろうか。

プロセス④**援助方法の決定**の低下の原因については、途上国への援助方法について学ぶ機会が少なすぎるものが考えられる。自由記述の回答の中にも、「方法を知らない」、「方法がわからない」などの記述があった。いくら援助の必要性を認知していたとしても、方法を知らなければ行動は生じてこない。学ぶ機会が少ないことがプロセス④の低下の要因であることが考えられる。上述のプロセス②を上昇させ、援助行動を促す具体的な手段としては、学校などで学ぶ機会を設けるなどが考えられる。自由記述の回答の中に「国際援助についてもっと学校で教えるべき」などの記述もあった。学ぶ機会が増えれば、プロセス④も上昇し、援助行動を促すことができるのではないだろうか。

ところで、自由記述の回答の中で「日本も今、不景気で援助どころではない」などの記述も多かった。確かに現在の日本は不景気であり、援助どころでないかもしれない。しかし、景気はいずれ回復するであろう。そうなったとき、我々はどこに目を向けるべきか、何をするべきかについて考えておく必要があるのではないだろうか。

本調査結果からは、状況的要因のプロセスの②援助の必要性の認知、③自己責任の確認、④援助方法の決定の各因子の低い人が、途上国への援助行動を抑制されやすいという結果が得られた。しかし本調査結果からだけでは、これら以外の要因が影響している可能性を否定できないだろう。

今後、さらに検討を深める事柄のひとつとして、1群の実情（例えば、援助行動を進んで行ったのか、それとも半強制的であったのか、その経験回数やその内容など）を十分に把握する必要がある。また、自由記述のテーマを「援助を行っている人が少ない理由、またどうすれば国際格差が縮まるか」としたが、この問いかけかたでは、答え方の幅が広すぎるため、今後さらに限定・特化した質問をすることが必要であろう。

引用・参考文献

- 井上肇 (1993). 対人援助の基礎と実際 ミネルヴァ書房
- Latan'e, B & Darley, J. M (1970). The unresponsive bystander : Why doesn't he help? Appleton-Century-Crofts, 竹村研一・杉崎和子 (訳) 1977 冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学 ブレーン出版
- 中村陽吉 (1976). 援助行動の研究—援助しやすい人の性格特性 東京都立大学人文学部 人文学報111, 11-22.
- 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子 (1987). 心理測定尺度集 I 新性格検査
- 伊藤美奈子 (1993, 1995). 心理測定尺度集 I 個人志向性・社会適応性 P N 尺度
- 原田純治・狩野素朗 (1982). 環境への親近性が援助行動に及ぼす効果 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 26 (2). 255-259.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). 心理測定尺度集 I 認知判断傾向 (成人用一般的) Locus of Controi 尺度
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 心理測定尺度集 II 情動的共感性尺度
- 水野邦夫・加藤志朗 (2006). ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか?—ボランティア活動とパーソナリティ特性, 社会的スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた考察— 聖泉論叢 (2007). 16, pp141-156.
- 酒井恵子・山口陽弘・久野雅樹 (1998). 心理測定尺度集 II 価値志向性尺度

援助行動に関するアンケート

I 個人的要因

1. 私は困っている人を見ると放っておけない気持ちになる。
2. 私は人の役に立てたり、人と助け合えたりすることに、充足感を見出す。
3. 私は他人のことを、深く理解したいと思う。
4. 私は人に対しては誠実であるよう心掛けている。
5. 私は社会のために役に立つ人*になりたい。
6. 私は周りとの調和を*んじている。
7. 私は周りの人*との競争は好まない。
8. 私は周りの人*との争いごとは避けるほうだ。
9. 私は自分の個性を活かそうと努めている
10. 私は自分の心に正直に生きている。
11. 私は周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる。
12. 私は何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い。
13. 私は人前では見せかけの自分をつくってしまう。
14. 私は困ったことがあると、すぐに頼ってしまう。
15. 私は個性が強すぎて、人とよくぶつかる。
16. 私は自分中心で考えることが多い。
17. 私は周りのことを考えず、自分の思ったままに行動することがある。
18. 私は話し好きである。
19. 私は生き生きしていると人に言われる。
20. 私は初対*の人には自分のほうから話しかける。
21. 私は人生における不幸な出来事の多くは、不*によるものだと思う。
22. 私はくじ引きや占いなどを頼りとして、決断を下すことがしばしばある。
23. 私は価値のある人は、運かれ早かれ世の中の人々の尊敬を受けるようになると思う。
24. 私は映画を見る時、つい熱中してしまう。
25. 私は人が冷*されているのを見ると、*常に腹が立つ。
26. 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。
27. 私は人がうれしくて泣くのをみると、しらけた気持ちになる。
28. 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、嫌な気分になる。
29. 私は周りの人が悩んでいても平気でいられる。
30. 私は感情的に周りの人からの影響を受けやすい。

31. 私は友人が動揺していたら、自分まで動揺してしまう。

32. 私は悪い知らせを人に告げに行くときには、心が動揺してしまう。

II 状況的要因

1. 私は世界の経済格差についてある程度知っている。
2. 私は母国以外の国の経済事情に*心がある。
3. 私は貧しい国の人、生活が苦しいと思う。
4. 仮に友人の大半が*上国の経済事情に*心があるとしたら、私も*心を持つだろう。
5. 私は貧しい国の人、援助を求めていると思う。
6. 私は貧しい国への援助は必要だと思う。
7. 私は貧しい国への経済的支援はなくてはならないものだと思う。
8. 自分自身が、何らかの援助行動を行う必要があると思う。
9. 自分には、貧しい国の人を援助する*任があると思う。
10. 私自身は先*国に生れたのだから、*上国に援助すべきだと思う。
11. 仮に友人の大半が援助活動を行うことに*任を感じていたら、私も*任を感じるだろう。
12. 私が援助をしなくても、周りの人がやってくれると思う。
13. 私は具体的な援助方法を知っている。
14. 私は貧しい国への援助の方法がわかる。
15. 私が援助を行っても、自分が大きな損をするわけではないと思う。
16. 私自身からの貧しい国への援助は、簡単なことだと思う。
17. 私は実際に援助を行おうと思う。
18. 友人に誘われたら、私も援助を行うだろう。
19. 私は実際に援助を行う気にはなれない。
20. 仮に友人の大半に援助活動の参加を促されたとしたら、私も活動に参加するだろう。

III 現在、日に約 万人が、貧困が原因で亡くなっているとされています。

しかし、それに対する先*国民個人の*心は*いとはいえず、援助を行っている人は少ないといえます。何故だと思いますか。また、どうすれば国際経済格差が縮まると思いますか。ご自由にお書きください。